

巻頭言

歩みを奏でる——150年の伝統を越えて

立教池袋中学校・高等学校チャプレン 李 相寅



立教学院創立150周年を記念して、2025年3月22～31日、立教池袋中学校・高等学校吹奏楽部の生徒たち47名と教員2名、チャプレンの私はアメリカを訪れました。吹奏楽の演奏を中心に、礼拝・文化交流・歴史探訪と多角的な体験を通じて、生徒たちはただ音を奏でるだけではなく、「立教の精神」を響かせる旅路を歩むことができました。

今回の訪問は、立教学院の礎を築いたチャニング・ムーア・ウィリアムズ主教の足跡をたどる「巡礼」の旅でもありました。3月23日、彼が育ったバージニア州リッチモンドの聖ジェームズ教会で、生徒たちは日曜礼拝に参加し、真剣なまなざしで準備を整え、地域の信徒の方々の前で演奏を披露しました。厳かな空気の中で響いた演奏は、世代も国境も超えて人々の心に届き、スタンディングオベーションというかたちで温かく迎え入れられました。

同日、ウィリアムズ主教の墓前にて行われた合同礼拝では、青空の下、主教の宣教の歩みに思いを馳せながら演奏と祈りを捧げました。生徒たちは一人ひとりが墓前に立ち、静かに頭を垂れました。その時間は、150年前の信仰の種が今日も変わらず芽吹いていることを感じさせる、かけがえのないひとときでした。

また、訪問中は現地の学校との交流も盛んに行われました。男子私立校 St. Christopher's

School では、満席の聴衆を前に演奏を行い、音楽の授業を通してジャズのアドリブ演奏も体験。昼食後にはサッカーやバスケットボールをともに楽しみ、言葉を越えた友情が育まれました。音楽とスポーツという共通言語は、生徒たちの心を結びつける強力な手段となったのです。

旅の終盤、ニューヨークではセント・ジョン・ザ・ディヴァイン大聖堂という荘厳な舞台で演奏を行いました。この大聖堂は世界最大級のゴシック建築であり、その空間に自らの音を響かせるという体験は、生徒たちにとって忘れられないものとなりました。また、ウィリアムズ主教を日本へと送り出された聖トマス教会にも足を運び、祭壇上に彫られたウィリアムズ像と、立教学院にある銅像との共通点を見出す中で、学院の歴史と自分たちの存在とのつながりを実感していました。

この旅で蒔かれた一粒の種は、やがて将来、豊かな実を結ぶことでしょう。そして、彼らが人生の岐路に立ったとき、この旅の記憶が、再び心の支えとなる日がきっと来るはずです。

150年、151年歩みを継承する者として、そして新たな未来を築く担い手として——彼らのこれからの成長に、心からの期待と祝福を込めて、この旅の記録をチャペルニュースに刻みたいと思います。



ウィリアムズ主教の墓前にて



セント・ジョン・ザ・ディヴァイン大聖堂で演奏中の様子